

IATSSフォーラム 20年のあゆみ



はじめに

国際交通安全学会が設立三十周年を経過したのに加え、IATSSフォーラムも20年の年月を刻んできた。20年を経過した今、IATSSフォーラムが今日までに果たした役割を再確認しつつ、将来のあるべき姿を求めて刷新し、いつも斬新なIATSSフォーラムでありたいと考える。それを行うことによって、このIATSSフォーラムの存在が明確になり、かつ、社会に認められる存在として認知され、その存在価値が改めて見直されることに期待したい。

IATSS設立三十周年という記念すべき機会を捉え、このIATSSフォーラムについてその存在価値を改めて考えてみる機会を得たことは誠に喜ばしいことであり、有意義なことと考える。

IATSSフォーラムの開始



IATSSフォーラム紹介パンフレット

私は今から5年前、このIATSSフォーラムへの転勤を命ぜられた時、最初に思ったことは“フォーラム”という言葉であった。この“フォーラム”という名称をどのようにして決定したのかについて大きな関心を持ち、当時の設立関係者に問い合わせしてみたのである。その結果、得られた答えは次のようなものであった。

“フォーラム”という命名は誰かが何か特別な意味を持って名づけたものではなく、だれ彼となくフォーラムという言葉が設立準備委員会のメンバーの中で多用され、いつしか“フォーラム”が一番適切ではなからうかということで“IATSSフォーラム”という名称になったということである。

私はIATSSフォーラムという名称がこのように名づけられた背景と併せて、このIATSSフォーラムが掲げたスローガン“Thinking and Learning Together”にもたいへん意義深いものが隠されていると考えた。“フォーラ

ム”という言葉といい、

“Thinking and Learning Together”といい、これらの言葉から連想できる自由闊達な意見交換の場面を即座に思い出させてくれるからである。いずれにしても、名称を“IATSSフォーラム”としたことはこれから行おうとしていた事業の真髄を的確に把握し、表現していると思った次第である。その造詣の深さに敬意を表し、名前負けしない事業にしていきたいものだと考えている。

さて、IATSSフォーラムの開始は、1983年12月マレーシア・クアラルンプール市で開催されたシンポジウム(“Technology Culture and Development”)、1985年10月に行われたタイ・バンコク市でのシンポジウム(“Urban Traffic and Environment”)、さらに1986年2月インドネシアのジャカルタ市にて開催されたシンポジウム(“Social Perspective of Technology Development in the Process of Modernization”)に遡るといふ。なかでもこのIATSSフォーラムの開講に大きな影響を及ぼしたのは、

マレーシア・クアラルンプール市のシンポジウムと思われる。なぜなら、当時のマレーシアのマハティール首相と本田技研工業(株)の創業者である本田宗一郎氏との間で話題になった、東南アジアの将来に起因していると思っているからである。当時、東南アジアの将来に目を向ければ人材育成は不可欠なものであり、その人材育成を行うために何かできることがないかを考え、その一助となるように検討されたものがIATSSフォーラムだったからである。そのような状況のもとで、東南アジア各国から、将来その国の指導者となる若い優秀な人材を日本へ招聘し、日本の近代化をテーマに、彼らと日本側が「ともに考えともに学ぶ」という理念のもとに、3か月間の研修プログラムを実施しようと考え、実行されたのがこのIATSSフォーラムである。

このIATSSフォーラムが開始された当時というと、日本経済は最盛期の時代であり“Excellent Company”とか“Japan As No.1”などの書物も発行され、世界でも日本経済の著しい発展に注目していた時代である。GNPIにおいてはアメリカについて世界第2位で、猛烈なエコノミックパワーを世界に示していた時代である。その当時、誰が今日の日本経済の停滞ぶりを予想したであろうか。1990年代に入り、日本のバブルエコノミーが崩壊。今日では過去10年を失われた10年と呼んでいるが、それでもこのIATSSフォーラムは継続され、東南アジアからの研修生を受け入れてきた。日本経済の最盛期に開始されたIATSSフォーラムであるが故に、日本企業の世界進出と相まって、国際化とか、国際協調、相互理解などと叫ばれていた時代の中では、このIATSSフォーラムの立ち上げは日本国内でも大きな注目を浴びたものと想像する。また参加研修生にとってもその時代で学ぶべき対象国として日本は魅力的な国であったであろうし、憧れの国であったと思われる。

開講式



IATSSフォーラム参加者総数

(第1回～第36回、2004年末現在)

カンボジア	12名
インドネシア	148名
ラオス	18名
マレーシア	139名
ミャンマー	6名
フィリピン	56名
シンガポール	50名
タイ	173名
ベトナム	25名
合計	627名

IATSSフォーラムの果たした役割

この20年の期間で東南アジアから招聘された研修生は627名に及んでいる。当時25歳で参加した研修生も今日では45歳になっており、各国にて各界の第一線で働いていると思われる。特に、当初、単一国での開催で参加したマレーシア、タイ、インドネシアの3か国における参加研修生は今日までにそれぞれ139名、173名、148名に及び、同窓生が多い分、その社会的な地位を得た同窓生が多いことは事実である。

2000年に実施した同窓生のアンケート調査でも明確な答えが出ている。アンケートの中で「IATSSフォーラムでの研修で得たことは何か」の質問に対し、日本及び日本人についての理解をあげていることは特筆すべき内容である。それだけ、大きな関心が寄せられていた証明である。したがって、IATSSフォーラムが目指した目的は充分達成することができたものと推測される。また、初期に参加した研修生に限らず、直近で参加した研修生もIATSSフォーラムに対しての思い入れは相当に強く、彼ら、彼女らの胸に強烈な印象を残したことも事実である。それだけ、短期間でありながら、強烈なインパクトを持ったプログラムであるといえよう。

人の気持ちに訴えることができるものは、やはり、人と人とのつながりであろうか。日本の近代化をテーマにしたプログラムではあるが、研修生がそこで求めたものは人を中心にしたプログラムであり、驚異的な経済成長を達成した産業そのものではなく、それを達成した原動力の人、すなわち日本人そのものだったのかもしれない。参加した時点では、はからずも理解し得なかったことを、後年実務を通して知ったということかもしれない。それだけに、このIATSSフォーラムに参加した研修生は、セミナーに、そして人との交流を念頭に置きながら用意された研修プログラムに貪欲に参加していたのであろう。また当時のアセアン諸国にしてみれば海外に出かけるチャンスはほとんどない時代であろうから、こうした機会は千載一遇のチャンスであり、それだけ厳しさを求められての参加であったに違いないと考える。フォーラムで作成したプログラムでは、広範囲でかつ多角的なレクチャーを受けるのであるから、十分な予備知識や事前情報が入りにくい状況にあり、さぞかしたいへんなことであったと思う。しかし聞き及ぶ限り、そうした困難を平然とこなしていたというから、さすが厳選された研修生であると感服したものである。

IATSSフォーラムの同窓生の中で社会的な地位を得た人たちを見てみると、インドネシアでは憲法裁判所の最高責任者になった人や、インドネシア議会での議長に選任されている人、あるいは大学の教授、マレーシアでは銀行の頭取他、自立し自営業を営む人、タイ、シンガポールでの官僚など、際立った実績を残している同窓生も多数存在している。

またこのIATSSフォーラムに参加したのを契機に、さらにその専門分野をきわめるため、それぞれの国の奨学金を受けて留学した同窓生は枚挙にいとまがない。併せて、その開催地である三重県鈴鹿市においても、地域における国際交流のみならず、三重県全体における国際交流促進の役割を担う団体として期待され、その存在感を示してきたと思う。

そこで、改めて20年間におけるIATSSフォーラムの成果を整理してみると、

- (1)困難な過程を辿りながらも継続できたこと
 - (2)アセアン諸国においてIATSSフォーラムの同窓生が600名以上存在し、精力的に活躍していること
 - (3)同窓生間での東南アジアにおけるネットワークが構築できていること
 - (4)日本の近代化を学ぶという趣旨であるが、他のプログラムには存在しない特異な企画として定着できていること
 - (5)三重県や鈴鹿市において国際交流を促進させる先導的役割を果たしてきたこと
 - (6)地域ボランティアとの強い絆が結ばれ、相互理解の場としての役割を果たしていること
 - (7)アセアンの拡大とともに、参加国も拡大されたこと
 - (8)研修生にとっては研修プログラムを通して、価値観の変化を感じとる契機になったこと
 - (9)何よりも日本、日本人について研修生が理解を深める機会となったこと
- など、多種多様の賛辞の声を聞くことができる。

これらはまさに、IATSSフォーラムが果たした今日までの実績であり、何物にも代えがたい事実であり、誇れるものであると考える。

このように列挙してみると、このフォーラムは一見、交流の場とか国際親善を図る場としての企画であるかのように思われる。表面上は確かにそうなるかもしれない。しかし今日まで私が会ってきた同窓生を見る限りでは、そればかりではなく、日本や日本人についてのよき理解者であることに間違いないと思っている。併せて、IATSSフォーラムの趣旨を忘れず、それぞれの国において発展の一翼を担う人材に成長している状況を見るにつけ、この上もなく頼もしく思った次第である。

このように、国際的な認識が不可欠とされていた時代において、小規模ながら、十二分にその役割を果たしてきたことは否定しがたい事実だと考えている。いずれにしても、IATSSフォーラムにとってこうしたよき理解者を持つことは大きな財産であるとともに、日本にとってもかけがえのない財産になり得るものと確信している。

新参加国で複数国のフォーラムへ

1967年8月、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピンの5か国の加盟で発足されたASEAN(東南アジア諸国連合)も、1984年のブルネイの加盟に加え1994年にはベトナムの加盟を認め、その後、ラオス、カンボジア、ミャンマーの加盟を加えてASEAN10へと拡大していった。こうした拡大とともに、IATSSフォーラムの参加国も順次拡大され、今日ではASEAN10の内ブルネイを除く9か国からの参加を得ている。



IATSSフォーラム開講当初はアセアン諸国の中の単一国からの研修生を受け入れ、その運営を実施してきた。それは自国の人たちの中での交流であり、日本人との交流である。こうした状況だけを考えれば、それはかなり限定された2国間あるいは同じ出身国の人たちの交流の場でしかなかった。つまり、それ以上の発展は期待できない状況にあったと思う。ところが、幸いと言ってよいかどうか選択する言葉には戸惑うが、1991年を境にして運営資金の問題が顕在化し、複数国参加のIATSSフォーラム開催を余儀なくされたのである。今になってみれば、逆にこれが幸運に転じ、アセアン諸国の多くの研修生が思い思いの意見交換を通して相互理解を深めることが可能になったわけである。以来、アセアン諸国の複数国のフォーラムに変身し、今日に至っているのである。ちなみにその拡大の経過は、当初のマレーシア、タイ、インドネシアに加え、シンガポール(1988年)、フィリピン(1991年)、ベトナム(1996年)、ラオス(1999年)、カンボジア(2000年)、ミャンマー(2003年)へと拡大していった。アセアン10か国のうち、実に9か国からの研修生を受け入れるに至った。残りはブルネイであるが、このブルネイについては現地委員会の設置に手間がかかっており、未だ実現していない。早い時期にブルネイからの参加も期待したいものである。

フォーラムの課題

IATSSフォーラムのプログラム内容や事業展開方法について20年前と比較した時、大きな変化もなく運営されてきていると思う。したがって、今の時代に適合したプログラムの内容に変更する時期にさしかかっているのではないかと思われる。なぜなら、20年前の東南アジアと今日の東南アジアとでは格段の違いを呈しているからである。特に、東南アジアの経済成長はめざましいものがあり、これからはアジアの時代であるとも言わしめていることから容易に推測できよう。世界でも注目に値するすばらしい経済成長を達成してきている今、東南アジアと日本との将来の結びつきは「何かをしてやる」とか「何かをしてもらう」という関係ではなく、イコールパートナーとしての関係で将来の関係を構築していく必要な時期にきていると思われる。

それでは、どんな変化が表れてきているかという点、まず言えることは、研修生の資質が大きく変化してきていることだと思ふ。新たに参加したベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマーなどの国においては参加経験も短いことから顕著な変化は見られないが、当初から参加してきている国においてはかなり大きな変化が感じられる。それは参加国の経済成長と歩調を合わせているかのように思える。マレーシア、タイ、インドネシア、シンガポール、フィリピンなどの著しい経済成長はその国の国民を豊かにし、生活様式そのものにも大きな変化を与えてきていると考えられる。その顕著な例は研修生の中に数多くの留学経験者や海外渡航経験者が含まれていることから容易に推測できよう。

このような事実を見る限り、従来と同じようなIATSSフォーラムのプログラムを継続していくのであれば、将来的に大きな進歩は期待できないであろうし、また相手国からも大きな期待を寄せられないかもしれない。重要なことは、その時代のニーズを把握し、組織の目的を明確にし、求められてい

るものを的確に用意し、提供していくことであると考え。それを実施することにより、このIATSSフォーラムが社会から期待される団体として、その存在価値が認められることになるだろう。そのためには世界に目を向け、広い視野と洞察力を持って今後のプログラムを構成し、より革新的なものとし、内容の充実を図っていく必要があるだろう。そして、20年前のIATSSフォーラムの狙いの一つでもあった国際交流、相互理解等から、個々の資質の向上にベクトルを合わせたプログラムとして実施していくことが必要なのではないかと考えている。

このIATSSフォーラムも今現在はアセアンにおけるIATSSフォーラムとしているが、近い将来、アセアン諸国からだけでなく、インターナショナルフォーラムとして変身せざるを得ない日がくるかもしれない。しかしこの国が、誰が参加しようが、今現在おかれている立場、すなわちフォーラムのコンセプトである“Thinking and Learning Together”は永遠に変わることなく残るであろうと、私は信じている。それがこのIATSSフォーラムの原点であると考えからである。

おわりに

1980年代の日本の急激な経済成長は、日本企業の積極的な海外進出に結びついた時代であった。その結果、あまりにも急激な国際展開から利益追求主義と見誤られ、エコノミックアニマルと比喻され、日本人の国際化遅れとか国際理解不足について大きく問われた時代でもあった。また相手国への進出をその国の経済発展に結びつけ、相手国にとっても非常に好ましいことであると独りよがりの解釈を行い、がむしゃらに経済追求を行っていたことも事実であろう。

しかしながら、いつまでもそのようなことを続けていられるわけでもなく、早期に改善すべきものであった。80年代半ばの著しい経済成長から約20年を経過する時期になって、やっと日本人に国際化や国際理解についての認識が深まってきたことも事実であろう。したがって、昔ほどそのようなことを言われなくなってきたものの、未だ、十分だと言われるレベルまでには到達していないかもしれない。そうした意味でIATSSフォーラムのような活動が将来も継続され、相互理解の架け橋となるとともに、ここで学んだ研修生がそれぞれの母国に帰り、将来的なリーダーとして、国で、地域で、企業で大いなる活躍をすることを期待するものである。

(IATSSフォーラム所長 芦澤敏夫)